

企業との連携プログラム実施企画書
実施企業 (株) NEC ソフト

(進行詳細は別紙1)

趣 旨

子ども・子育て応援プラン(新・新エンゼルプラン)が策定され、次世代育成支援の行動計画作りを含め、労働時間の短縮や、働き方の見直しなどが社会的な課題となっています。また企業の社会貢献等も注目される所となり、今後地域社会と企業の連携はますます必要になってくると思われ

ます。そうしたなか、企業の事情や実態をふまえつつ、地域の子育て支援センターや研究者が企業とどのような関わりをもつことができるのかを模索し、研究と実践を積み重ねていくことにより、次世代育成の新たな道筋を見出すことを趣旨とします。

目 的

今回は第一回目ということもあり、まずは地域での子育ての現状や、保育園などの状況、育児相談の現状などを知っていただき、その後で子育てをしながら働いている当事者の方々にとって興味のあることや、聞いてみたいことなどについて、情報の交流をすることを、目的とします。

実施方法

- ① 日時 2005年2月14日(月)か
2月21日(月)のいずれか
午後3時~午後5時
- ②対象 乳幼児期の子どもをもつ男女
職員
- ③ テーマ 「子育てのこと、地域の
こと、一緒に考えてみませんか。」
-ワークライフバランスを考える-
- ④内容 子育てに関する情報提供と話
し合い

⑤人数 7,8名から10名程度

- 留意点 ※ プライバシー等には十分配慮する
※ 公費による研究事業であることから、報告のための写真等記録をとることを承諾していただく

別紙1

進行詳細

- 15:00 挨拶 趣旨説明
- 15:10 ミニ講演「子育てをめぐる様々な状況」
江東区を例にとって
様々な子育て
の実情を紹介
育児相談の例や保育園や
幼稚園の状況、保健所や子
ども家庭支援センターみず
べの紹介など
- 15:45 質問・ディスカッション
ミニ講演の内容などへの質
問、または各自興味があるこ
とについての質疑。
自己紹介を含め、それぞれの子
育ての状況など話してい
ただく。
こうした会の開催や内容へ
の要望なども伺いたい。
- 16:45 まとめ
- 17:00 終了

②びーのびーの

地域・企業との連携

実施ひろば名

おやこの広場びーのびーの

実施担当者

原美紀(びーのびーの事務局長)・
米田佐知子(NPO 法人神奈川子ども未来
ファンド事務局)

実施日時

①平成 16 年 8 月 26 日(木)

②平成 17 年 1 月 15 日(土)

実施対象者

近隣区内および市内の参加者。基本的
にはイベント開催告知によるチケット購
入参加者 共に約 300 人の動員

実施の方法と内容

びーのびーのが理事団体として参画し
ている神奈川子ども未来ファンド(以下
ファンド)という NPO 法人の活動を通
じて実施したプログラムである。

ファンドのそもそもの理念は「子ども
も若者・その家庭を取り巻くさまざまな
課題に対して取り組む常設の居場所の運
営を支えるために個人や企業・団体らの
気持ちを寄付行為として集め、配分する」
ことにある。よってそこでは多種多様な
寄付プログラム&メニュー開拓を設立後
2 年間でびーのびーのおよび構成員で自
らが前面に立ち培ってきた経緯がある。
そしてその大きな目的は寄付だけでなく、
寄付という行為を通じて、子どもたちへ
の意識をも変えていこうということに
あり、個人個人からの少なくとも幅広い
支援の必要性の一方で、企業などからの
大口・小口の寄付および寄付に結びつく
有形無形の協力支援体制も欠かせないも
のとなっている。

今回の取り組んだこの 2 つのプログラ

ムは共にイベント開催での寄付プログラ
ムであるが、大々的に打ったこのイベン
トでは主に①は財団法人や地元企業との
協力連携を、②は財団法人と社会福祉法
人、民間企業との連携を生み出したこと
になった。

アニメーション映画「ハードル」

チャリティ上映会開催

行政が場所の確保や広報の一旦を担い、
実際の企画運営は地元 YMCA とびーの
びーので行った。また当日配布パンフレ
ットについては地元工芸企業がその印刷
費を支援してくれて多くの賛同人協力
のおかげで夏休み中の親子連れの動員が可
能になった。

会場では原作者の挨拶やサイン会もあ
り、また舞台挨拶も共催者と共に協働で
行うことができた。地元開催のイベン
トを通じてさまざまな個人的ネットワー
クの構築も可能になったことと、対象者か
らのアンケートや感想にじかに触れるこ
ともできて、実り有るイベントであった。

親子でhappyフェスタ2005

本イベントは財団法人の基金団体と社
会福祉法人の市事業団との連携で行った
プログラム(事業)である。障がい者が
主に利用する区内のホールを借り上げて、
聴覚障がいを乗り越えて実現するユニッ
トの歌に合わせて会場が一緒になって手
話で歌ったりその一体感を楽しむコンサ
ートの開催だった。

県の福祉事業協会からは当日障がいを
抱える子どもたちや母子寮の子どもたち
のご招待枠を寄付として支援してもら
うこともあった。また市内とラベル会社や
メーカーからの協賛も得ることができた。
当日は350名を越える参加者で「夢を
あきらめないで」というメッセージに感
動と共感の声が寄せられたものとなった。
その際の参加者からの感想や絵などはそ
れぞれの企業・団体の寄付者に対しての
御礼としてお返しすることにも努めた。

なるべくこうした寄付行為に対しては、

カタチに残る、生の感謝でもってお返しすることは手渡した寄付団体の反応を見て必要だと再確認した。現にこの営みを丁寧にしていくことが次のさらなる支援につながることで実証されている。

結果的にこれら2つのプログラムを通して約100万以上の寄付が集まり、これが次年度のびーのびーのを含めた、子ども・若者や子育てに関わるNPOへの助成金として神奈川子ども未来ファンドへ寄付され、他で集めた寄付総計として、現場を持つ団体に配分されることとなる。

こうしたイベントを通じての企業・各種法人・団体からの寄付集めはそのテーマによって対象分野を限定することが可能になることから、協力依頼はひろばへ直接的支援よりよりアプローチしやすいことが実証されたと思われる。

評価

プログラム実施の意義と課題

意義については前述した通りだが、こうしたイベント実施にあたる連携は多数見受けられるが、いくつかのこうしたプログラムを継続してきた結果得られた学びを整理すると以下ようになる。

- ① 協力して欲しい内容を相手先に端的分かりやすく提示すること。またその回答期限をきちんと設けること
- ② 相手先に連携したメリットがどこにあるかを相手先の現状を反映してピンポイントに明示できること
- ③ 実際に交渉している担当者の裁量範囲を知り、早く確実に連携、協力を仰ぎたければそのマックス限界範囲内に収めて提示しておくこと
- ④ プログラム成功だけでなく、実施にまつわる背景や社会的に及ぼす影響、子育てに対する理解や次世代育成支援の視点を少なくとも担当者に、できれば団体に対して持ってもらおうよう働きかけること
- ⑤ 想定した連携範囲を超える協力体制を築ける土壌なり雰囲気を作ること

⑥ 実施した後の細かいフォロー体制（実施結果の提示や感想などの見せ方出し方の工夫）と次への連携項目を想定し予告してつなげていくこと

⑦ 概ね以上のことはもっと細分化すると、ファンドレイズにおける必要条件となってしまうが、どんな連携についても少なくとも以上のようなことは担当者して係れるようなモチベーションが必要になってくるだろう。

従って課題としては、この一連のフローをプログラムの実施成功を求める一方で連携先に対しても求められる視点が多々あることから、「担当者・事務局・コーディネーター」の役割を複数でバックアップできる体制が必要なことある。

連携先の団体を取り巻く内・外部の状況に敏感になりながら、自団体によって協力してもらいたい項目を打ち出していくことは、先方の担当者との「より開かれた関係づくり」が必要になってくる。それには一方的にこちら側の要求だけを突きつけるのではなく、連携先の視点に立って、今求められていることは何か、その規格を時には連携先のサイズに合わせていくことも遠回りなようで必要になってくる。

連携先とのキャッチボールを常にまめにしておくことは団体内の情報公開にも結びつくことからその行為は決して遠回りなだけで終わらない、こちら側にもメリットが多々あることなのである。

連携しながらプログラムを実施したり、団体を運営していくことは自分たちの最終目標を見つめる目を多くしていく行為につながり、子育てしやすい社会に対する目を創ることに他ならないのである。

このことへの確信があって初めて連携先との間でのさまざまなトラブルや葛藤・山場も担当者として乗り越えられるのだと思われる。

(9)ひろばでの相談

①びーのびーの

1. 子育て発達相談の日

臨床心理士の先生にひろばで相談にのっていただいていた日(月)に一度あります。

伊志嶺美津子先生(関東学院大教授・臨床心理士)・櫃田紋子先生(浦和大学教授)が相談にのってくださいます。びーのびーのは設立当初から両先生に活動を応援していただき、多大なご助力をいただきました。子育て発達相談日は設立時5年前から続けられています。

専門の先生による子育て発達相談日があるので、何かわからないことは全てこの日を紹介することができます。そのためスタッフは大きな安心感を得ることが出来ます。また、スタッフが疑問や不安を先生たちに相談することも出来ます。大変恵まれた環境であると思います。

2. グループ相談

座談会を開いています。2004年は以下のように行いました。テーマを決め参加者を募りスタッフが進行役に入り、会員さんとの座談会を持ちます

★座談会&ティータイム

日時	プログラム名	参加数
1/23	入園前に聞いてみよう	10
2/18	お産を語ろう	6
5/28	3世代のつながり	5
	第1子・第2子!	
9/29	みんなどうしてる?	7
12/15	お産を語ろう 2	6

total 28

座談会とは別に、子育て発達相談の先生が来てくださっているときで、相談の会員さんがいないときは、先生を中心に座談会のように皆で話し合いの場を持つこともあります。例えば、以下のような例がありました。

事例1

以前来たときに実母との関係を悩んでいた会員のAさん。今日は伊志嶺先生がいらしたので、急遽ラフな座談会を持ちました。学ボラさんサポーターさん大人の手が多い日で、明るい太陽の下、子どもたちは学ボラさんと外遊び。それをガラス越しに見ながら、自分の母について語り合うことが出来ました。話は尽きないで、ずいぶん話し込みました。「びーの人はみんなお母さんと仲良くて、幸せそうに見えていたけれど・・・人それぞれ悩みや、苦しみあるんですね」と、会員さん。先生が加わってくださったことで、内容に厚みができました。

スタッフが以前から会員さんの思いを知っていて、上手く座談会につなげることの出来た例だと思えます。

3. 電話相談

電話相談を専門の窓口で受け付けているわけではないのですが、多くの相談があります。『幼稚園・保育園ガイド』を発行しているため、園選びに関する相談もあります。子育てに関する相談、地域の情報に関する相談、様々な相談に関係機関を紹介したり、実際にひろばに来てくださることをすすめたりして対応しています。以下のような例もありました。

事例2

マタニティの方からのメールの問い合わせ。園選びどころか産院選びからの相談でした。その方は、その後、流産してしまったのですが、しばらくの間、時々メールのやりとりがありまして、次の子を妊娠して、マタニティクラスにきてくれました。とてもうれしかったです。

④場としての相談機能

場の持つ相談機能もあるかと思えます。伊志嶺美津子先生が「ちょっと相談」と

言うような、スタッフとのちょっとした立ち話での相談、仲間同士あるいはちょっと先輩のお母さんとの話で解決されること、このように集う場があるからこそ、出来ることであると思います。

先日は100メートルほど先のスーパーマーケットから「泣いちゃって買い物できなかったあ」と会員さんがやってきました。お店で大泣きされ、駆け込むようにびーのびーのに入ってきてくれたのです。後でスタッフ同士で、「赤ちゃんが小さいとき、そういうことあったよねえ」「近くにびーのがあってよかった」「昔はなかったもんね」と話し合いました。何もなかったところに、このような場を作った、そのことが孤立しがちな子育て世代にとって、まず大きな支えとなっていると思います。

まずこのような場があること、そして次はその中味をより充実させることが課題であると思います。伊志嶺美津子先生が「言葉でない相談、雰囲気作り」の重要性をのべています。子どもがけんかをしたとき、お母さん同士が気まずそうなとき、どのような雰囲気作りをするか、それによって大きな悩みにいたらずにすむ様な、相談になる以前の場としての相談機能についてより充実させていきたいです。

(10) 特別なニーズへの対応

① くすくす

障害のある子どもたちとの関わりの中で

子育てネットくすくすでは、2004年4月より以前から行われていた子育て広場事業に加えて障害を持つ子どもの日中活動支援、児童デイサービス「すまいる」を開始した。「すまいる」では0歳～小学校卒業までの障害のある子どもが過ごしている。子育て広場を実施している民家の1階においてデイサービス事業、2階において子育て広場事業を実施している。今回のプログラムは日常の広場の中での障害のある子どもたちとの関わりと交流を目的とした広場以外での関わりの両視点から見ていく。

プログラム名

障害のある子どもたちとの関わりの中で

実施ひろば名

特定非営利活動法人 子育てネットくすくす 子育て広場

実施担当者

樋笠恒子・松木由佳

(両者とも子育て広場兼児童デイサービスすまいるスタッフ)

実施日時、回数、実施場所

- ・ 日常の広場の中での障害のある子どもたちとの関わり

2004年4月～現在

子育てネットくすくす子育て広場、児童デイサービスすまいる内において

- ・ 交流を目的とした広場以外での障害のある子どもたちとの関わり

香川県綾上町柏原溪谷キャンプ場において

2004年8月21、22日 くすくすキャンプ

参加人数：54人(スタッフ、ボランティア、兄弟児含む)

選出方法：参加希望者

2004年12月25日 くすくすクリスマス会

香川県善通寺市総合会館において

参加人数：100人(スタッフ、ボランティア、兄弟児含む)

選出方法：参加希望者

実施対象者

子育てネットくすくす広場利用者・児童デイサービスすまいる利用者

実施の方法と内容

- ・ 日常の広場の中での障害のある子どもたちとの関わり

普段の広場の中で、子育て広場の利用者とするにきている子どもたちとの関わりに接する。あえてこちらから意図的な関わりをさせようとはせず、普段の広場の中での子どもたち同士の関わり、親の対応などを見守る。時に様子を見ながらスタッフが間に入って関わりを持ちながら対応をしていく。実施担当者のスタッフについては以前より障害のある子どもたちとの関わりをもつ機会があり、その関わりや対応などを広場利用者に自然と目にしてもらおうようにした。

実施結果

子育て広場利用者に対してアンケートを実施したのでその内容について記載する。

(実施日：2004年11月15日～22日)

問1 障害のある子どもたちと関わることをどのように感じているか率直にお書き下さい。

- ・ 普段の生活の中では障害をもっている子どもとの接点は全くない。「すまいる」の子どもたちと時間を共にすることができるおかげで子どもたちの温かさを感じることができ嬉しく思っている。子どもにとってもあいさつをすることが自然になり、一緒に過ごすことを楽しんでいるように見える。
- ・ 普段障害をもっている子どもと接する機会はほとんどないので関わるとなるとどう接していいのかわからず、戸惑ってしまう。もっと普通にしたいと思う。子どもにとっては小さいうちから障害をもっている子どもと過ごしていたら自分と違う所も1つの個性として見れるのではないかと思う。
- ・ とても良いことだと思う。一緒に遊んだり、刺激し合い自然に関われることが嬉しい。子どもは何も感じず接していると思う。
- ・ とてもいい機会の場を与えてもらっている。普段の生活の中で障害をもっている人たちと接する機会がないので自分自身も子どもにとっても学びの場となっている。
- ・ 多くの人に囲まれて育つということはとても素晴らしい環境だと思う。障害をもった子どもたちといることで世の中にはいろいろな人がいることを当たり前を受け止められる人になってもらいたい。子どもたちは友達として興味があるみたいだがうまくコミュニケーションをとれないようだ。
- ・ 障害をもった子どもたちとより身近に感じられる場、共に過ごせる場に親子でいつか身を置いてみたいと思っていたので、「すまいる」で様々な社会を知ることができてよかった。子どもたちは子どもたちなりの感じ方をしている様子。年齢に

よって感じる事は違いもありとても興味深い。

問2 「すまいる」が始まる前と現在との違いについて感じることをお書き下さい。

- ・ いろいろな個性があって、いろいろな子どもがいてこそ楽しい、学び合えると感じている。それまではそういった目で子どもたちを見つめることができなかった。
- ・ 偏見や差別ではなく共に支え合って遊んでいる子どもたちを見て嬉しく思う。障害についてもっと学び自分の出来る範囲でサポートしたいと思うようになった。
- ・ 特に違いは感じない。子どもは友達が増えたくらいに思っているのではないだろうか。他の人はどう思っているのか分からないので知りたい部分もある。
- ・ 視野が広くなり障害者に対して明るい感覚が芽生えた。

実施スタッフの感想

すまいるが始まった当初は、すまいるの子どもたちが来ていると広場利用者が1階に行くことを遠慮しているように見えた。それは今まで障害のある人との関わりがなかったためどのように関わったらよいのか分からないという不安からくるものであったように思う。しかし子どもたちは不思議そうな顔をする子もいたが、関係なく一緒に過ごすようになっていった。徐々に広場を利用している親子もすまいるに来ている子どもたちの名前を覚え、一緒に過ごすことにためらいを感じなくなっていった。その子どもの障害について理解しようとする気持ちも生まれてきたように思う。普段の広場の中で障害のある子どもたちと継続して関わりをもてたことがこのような気持ちを持てたのではないかと考える。今では広場のお母さん方がすまいるの子どもに絵本を読んであげたり、身体に障害のある子どもの手を握ってあげるというような光景も目にするようになった。広場の子どもたちにとっても障害のある子どもたちと関わりをもつ中で人に対する優しさがもてるようになってきているように思う。

- ・ 交流を目的とした広場以外での関わり

2004年8月21、22日 くすくすキャンプ 香川県綾上町柏原溪谷キャンプ場において子育て広場利用者、非会員(会員以外の参加者も募集した)、すまいる利用者、ボランティアから参加者を募集した。参加人数54名(スタッフ、ボランティア、兄弟児含む)

企画の段階から広場スタッフ、すまいるスタッフと共同でプログラムの立案、下見等を行ってきた。宿泊の部屋についてはバリアフリーの部屋の確保、交流が深まる様な部屋割りの配慮など、すまいるスタッフからすまいる利用者の声を取り入れることができるようにした。キャンプならではの「川遊び」「すいか割り」「キャンプファイヤー」は、自然の中で日常体験することが出来ない企画を取り入れた。食事もみんなで楽しく交流する場となる

ように、キャンプ場の一角で集まったの会食とした。夜間子どもたちが就寝してからの懇親会には、親たちが集いお互いの顔を見せ、意見交換も盛り込んだ。

2004年12月25日 くすくすクリスマス会 香川県善通寺市総合会館にて
キャンプ同様子育て広場利用者、非会員、すまいる利用者、ボランティアから参加者を募集した。参加人数100人(スタッフ、ボランティア、兄弟児含む)

クリスマス会は、スタッフ、ボランティアを中心にみんなで音楽やゲーム、出し物等を手作り企画で構成した。子育て広場の会員御夫婦による出し物、子育て広場で定期的に絵本の読み聞かせをして頂いているボランティアの「ゆめのぼけっと」さんによる大型紙芝居と手遊び、学生ボランティア、スタッフ、会員のお母さんたちの楽器のセッションに合わせての歌とダンシング。普段から子育て広場とすまいるを支えてくれている方々の協力を得ての、協働のプログラムとなった。

昼食の時間は、利用しやすい様に和室とフローリングの部屋を準備した。参加者の持ち寄りメニューもあり、交流に一役かっていた。

・実施結果

上記の2例を総括して実施結果とする。イベントやプログラムを利用することで、平素の広場やすまいるの活動では体験でき得ない雰囲気や経験の広がりを感じた。何よりも新しい出会いの場でもあり、一つの行事に沿うことで協調感が生まれやすく、子どもたちも親たちもとてもリラックスした様子で参加でき、お互いに少しずつ馴染んでいく様子が伺えた。ぎこちない面も見え隠れするが、参加者親子の楽しむ顔に自然な交流を感じる。

その反面、行事に関しては裏方の業務をスタッフが担うことが多い。業務に追われ、参加者との交流や、よりスムーズな仲介としてのサポートができなかったという反省が挙がった。しかし何もかもをスタッフが取りまとめ、お膳立てするのではなく、当事者である参加者同士の自主性や盛り上がった姿を大切に見守りながら、本来のスタッフとしての関わり方を問うていく必要性を感じた。

子育て広場とすまいるの今現在のあるがままの関わりを見守りつつ、様々な体験・交流の場を持ち、大人・子どもにかかわらず人間としての関わりを深めていきたい。

評価—プログラム実施の意義と課題

今回のプログラムにおいては、日常的な広場での障害のある子どもたちとの関わりと交流を目的とした広場以外での障害のある子どもとの関わりとの2つの観点から見ていったが、スタッフ、利用者ともに障害のある子どもたちと関わっていくことで得ることは多くある。多くの人と関わりをもつ中で子どもたちには成長してもらいたい。

日常的な広場の中での関わり（継続した関わり）だからこそ得られることも多くある。

引き続きそのことも大切にしながら、今後の改良点として親同士が関わる機会をもっと増やしていきたい。すまいるは預かりが主流であるため親同士が関わりをもつ機会が少ない。障害のある、なしに関係なく同じ子どもをもつ親同士、子育ての嬉しさや悩みを共感してしていくことが大切なのではないだろうか。広場利用者へのアンケートにおいてもすまいるに来ている子どもたちや親との交流の場を設けてほしいかという質問で「はい」と答えている人が多いことから、今後もキャンプやクリスマス会のような交流の場などを取り入れていき、親同士の交流を増やすことができると感じた。またその際にはスタッフも間に入り対応していくことの必要性も感じた。

障害のある、なしにかかわらずみんなが楽しく過ごしていける、そんな広場を目指していきたいと思う。

(11) 支援者の研修

① びーのびーの

「みんなで話そう会」

実施ひろば名

おやこの広場びーのびーの

① びーのびーののみんなで話そう会

びーのびーのでは2004年度みんなで話そう会を、ほぼ月1回、年8回実施しました。中でも5月9月1月の3回は、専任アドバイザーの伊志嶺美津子先生がファシリテーターとしてお付き合いくださり、2時間近くの時間をとり行うことが出来ました。

びーのびーのは、子育て当事者、保育士、助産師などの集まりです。提案に「ひろばは乳幼児の親子を対象とする特殊性から、保育や子どもについての経験・知識や専門性を持つ人がリーダーシップをとる可能性が多くなる。そうした中では専門性を持った人に「保育とは、支援とはこういうものだ」

「こどもとは…」と他のスタッフやボランティアが指導されることが起こりやすくなる。その結果、その言葉を絶対的なものとして自らは考えなくなったり、指導に縛られて自らが生き生きと動けなくなるなども起こりやすくとあります。びーのびーのは当事者であることに大変こだわりを持ってスタートしています。指導されるだけ、支援されるだけではなく、当事者も生き生きと活動に係わることが、びーのびーのの原動力となっています。といっても、提案に「職能集団として共通の言語を持っている場合とはまったく違い、「保育」「子ども」「見守り」といった言葉一つひとつにも理解が異なる。多くの人はいこれらの言葉について考えたこともなく関心も薄かったりする。」とあるように、「ひろば」「見守り」といった言葉を前に保育士はなんと言ってくれらるうか、誰かが答えを出してくれないだるうか、自分はどう行動すべきなのか、誰かが教えてくれないかという雰囲気は濃くあります。そこで、個人が生き生きと活動できるように、正解がない子育てという分野の中でそれぞれが考え、お互い生かされていけるような研修の形が必要であると思われました。

びーのびーのは幸いなことに設立時から専任アドバイザーに恵まれ、専任アドバイザーの伊志嶺美津子先生に支えられながら、互いに話し合い、聴いてもらい、そこから気づくという研修を導入することが出来ました。一つは日々の出来事を振り返る「振り返りミーティング」であり、もう一つは何かテーマを決め互いに話し合う「みんなで話そう会」です。どちらも、「正解がないこと」「多様な考えを互いに知り合うこと」「聴き、聴いてもらう経験をすること」「それぞれの気づき」を重視し、そのことによって、個人が活動に意欲的に係わることを支援したいと考えています。びーのびーのでは2003年度に、この「みんなで話そう会」をスタートさせました。講義形式の学びしか経験したことのないスタッフが多く、このようなかたちの研修には抵抗が多かったのは事実です。「で、なんだったの?」「じゃあ、どうしたらいいの?」正解・結果の出ない研修に初めの頃は多くの違和感が残りました。しかし、「個人が常に考え続けなければならないこと」「正解もないけれど不正解もない」「それぞれの答えが認められること」をスタッフが実感するのは、子育て支援施設として非常に重要であると思われました。我々は子育てについても、どこかに正解があると思いがちです。講義形式の研修を積み、子育ての知識・技術について「これが正解よ」と指導する子育て支援施設になるのではなく、互いに見守りあい認め合える子育て支援施設となるために、このみんなで話そう会はとても有用であると思います。

② 実施方法

びーのびーのは30名ほどのスタッフに協力スタッフ、サポーター、学生ボランティアの大所帯です。全体会も20名以上で行われます。そこで、みんなで話そう会は伊志嶺美津子先生のアドバイスを戴き以下のように進めています。()はおおよその時間目安です。5月9月2月の1日全体会時は2時間近くの時間をとり、この時間に近い形で進めています。それ以外の月は縮小版で行っています。

- 1) 全体に向けてファシリテーターよりテーマの投げかけ(5分)
- 2) 近くにいる人4から6人グル

- ープとなり、そのテーマについて話し合う。(15分)
- 3) 各グループの発表(10分)
 - 4) 発表を受けファシリテーターが3つくらいの小テーマをたてる。(5分)
 - 5) 関心のある話したい小テーマごとのグループに分かれ、話し合う(45分)
 - 6) 各グループ発表(20分)
 - 7) 発表を受けファシリテーターのまとめ(5分)

実際の例

- 9月「ひろばで気になること」
- 1) ファシリテーターよりテーマの提示
 - 2) この回は24名の参加者があったので、6人4グループに分かれ自由に話す
 - 3) 各グループの発表
 - ・外あそびが少ない
 - ・大きい子達が思い切り遊ぶと赤ちゃんが危険
 - ・スタッフが会議をしているのを、お母さんたちはどう思っているのか
 - ・学ボラはなにをすればいいのか
 - ・新しく大倉山に移って、ひろばに慣れずスタッフも落ち着かない
 - ・虐待が疑われるときは、どう対応したらいいのか
 - ・大倉山の会員さんは参加型ではなく、提供を待つお客さんが多いのでは
 - ・学ボラは、子どもに注意をしづらい。特に親が見ていないときに子どもが何かしたとき。
 - ・スタッフの子どもが知っている子ども同士で遊んでいるのは、垣根になっていないか?
 - ・新しい会員さんが孤立しやすい。入り込めない雰囲気があるか?
 - ・プログラムの時間に、プログラムに参加しない親子の居心地は? 等、多数。
 - 4) 多くの発表を受け、ファシリテーターが以下の4つの小さなテーマにまとめる。
 - ①ひろばでの子ども
 - ②保護者への対応
 - ③学生ボランティアのあり方
 - ④新しいひろばで
 - 5) 各自話したい小テーマごとに、

グループとなり話し合う。

- 6) 各グループ発表
- 7) 発表を受けファシリテーターのまとめ

③スタッフへの投げかけについて

「みんなで話そう会」について、スタッフには以下のように投げかけています。

みんなで話そう会ーびーのびーのを支える人たち、みんな話(わ)になれー

走り続けるびーのびーの、普段はなかなかゆっくりと話し合うことの出来ない私たちですが、話そう会を持ちましょう。互いの様々な意見にびっくりしたり、認識を新たにしたり、元気をもたらったり…。びーのに係わっていて持った素朴な疑問、みんなはどうしているのかなと思うことなど、話し合ってみたいテーマを募集します。どんなことでも結構です。

投げかけにおいて留意したことは、手を出しやすい、そして何を言っても否定されない雰囲気です。「みんなで話そう」と言っても、専門家集団ではありませんので、すぐに親子の事例が出てくるわけではありません。何を話したらいいのか、ひろばで起きたことと言っても何も出て来ないのが当然です。加えて、びーのびーのは大変忙しい団体です。話し合わなければならない事務的事柄、運営的事柄、行事は常に山のように存在しています。大変気をつけていなければ、すぐにそのようなミーティングへと会話は変化してしまいます。ですから、いつもと違った場であることを印象付けながらも、入りやすい、難しくない会なのだというメッセージを大切にしました。

④2004年度のテーマ設定

- | | |
|-----|---------------------|
| 4月 | 料金設定について |
| 5月 | びーのびーのでやりたいこと |
| 6月 | 学生ボランティアの家庭育児支援について |
| 9月 | ひろばで気になること |
| 10月 | ひろばと預かりのあるひろば |
| 11月 | 来年度体制についての話し合い |
| 1月 | ひろばでの子どものトラブルと |

スタッフのかかわりについて 2月 私の今年のびーのびーの

テーマについてはアンケートで募集しました。みんなで話すために、スタッフにとって関心のあるテーマを設定したからです。アンケートの回答の一部を紹介します。

- ・びーのびーののこれからと自分のこれから
 - ・第1子第2子
 - ・家族はびーののことをどう思っている？
 - ・子連れでスタッフのシフトに入るとき、自分の子のケアはどうしているか？
 - ・子連れではないスタッフは子連れスタッフにどういう態度をとってもらいたいのか？
 - ・男の子と女の子の違い
 - ・ママ支援？子ども支援？
 - ・一人っ子、兄弟姉妹
 - ・びーのでの子どもとのかかわり
 - ・子どもの発達
 - ・子育てがどうして大変か、どうしたら周り(夫)に伝えられるか
 - ・子どもの発達が気になるお母さんの対応
 - ・子育て支援者としての心構えって？
 - ・子どもの求めるもの・親の求めるもの
 - ・子育て中のママがリラックスできる時・環境・物
 - ・ママと子ども・パパと子どもの関係
 - ・びーのの料金体系について(もっとシンプルに出来ないか)
 - ・ひろばでいままであったいろんなこと(ケースごとに意見を聞きたい)
 - ・びーのに係わることになったきっかけ、そして今
 - ・自分にとってボランティアとは
 - ・ご近所にびーのの理解者をつくるために(周りにどう説明するか)
- びーのびーのは子育て当事者であるスタッフが中心となって運営しています。アンケートの答えからも、子育て中の当事者としての姿、子育てをしながらボランティアとして、これまでにない新しいびーのびーのというものを作っていこうとするスタッフの姿が見えるかと思えます。手の出しやすさ、否定されない雰囲気大切に投げかけへの答えです。どの回答も丁寧に受けとめることが大切と考えています。そ

の上で、テーマとしては皆が話しに参加しやすいもの、何かひろばにかかわるスタッフにとって気づきが得られそうなものを設定します。

今年度の初回は4月ということもあって、強い希望があり「料金設定について」話し合うことになりました。非常に忙しい4月、スタッフは多くの決定しなければいけない事項を抱えていました。とても「ひろばでの子どもの遊び」などといったテーマを投げかける雰囲気ではありませんでした。そこで「料金設定について」マタニティ、対象年齢外の兄弟児、びーのの卒業生である幼稚園児、遠方からの参加者など通常の料金設定に当てはまらないいろいろなケースがあります。一つ一つのケースとつながりを持ち続けることに、地域の中にあるびーのびーの意味があると思います。料金を決めるための話し合いではなく、料金を窓口に一人一人に思いを馳せ、つながりを持つことの意味や意識について話し合ってみたいです」と投げかけました。

⑤年度初めと年度終わりのテーマについて

今年度は年度初めで長い時間が確保できる5月に「私がびーのびーのでやりたいこと」というテーマを設定しました。忙しい活動の中で「私は本当は何をやりたいのか」を見直すことによって、自らの選択と責任によってびーのびーの活動に係わっていることを明確にし、自分自身が本当にやりたいことを再確認することによって活動の方向修正、意欲的にかかわりを引き出すことをねらいとしました。「みんなで話そう会」の最終回は「今年の私のびーのびーの」とし、それぞれの1年を振り返り思いを語ってもらいました。これは5月の公約が果たされたかどうかではなく、この時点で自分とびーのの1年を、自分なりに振り返って意味のあるものとして再認識することで次年度への活力とし、さらにそれぞれの生活の中での活力ともしてほしい、という思いから設定しました。

このテーマ設定には、一昨年2003年度の活動において、びーのびーの活動は忙しすぎる」「磨り減り感がある」「燃え尽きてやめたくなる」などの感想が多く聞かれていたことが関係しています。高額な家賃を払いながら、

子育て当事者として子育て支援施設を運営しているスタッフの本音でありながら、「追われるように仕事をしている」「自分の子どもを犠牲にせざるを得ない」「やりがいを感じられない」「自分のやったことに自信が持てない」などの言葉は痛ましくもありました。そこで、このテーマ設定を行いました。結果は、ボランティア活動を続けるに当たってこのテーマ設定は個人個人の活動意欲を高め、それぞれの意識を明確にすることに大変有効であり今後も年度初めと終わりには、このテーマを設定したいと考えています。

事例1

5月の「びーのびーのでやりたいこと」において、サポーターAさんは初め「お母さんに対して言葉遣い、視点が厳しくなりがちなので気をつけたい」と話していました。びーのびーのでの活動も長くなり、ひろばにも慣れ、いろいろなことが目に付くようになってきたそうです。「こうすればいいのに」「もっとこうすればいいのに」と気づくことが多く、気になり声をかけてしまうことがあり、いけないと感じているそうです。5、6人の小グループで順に話しながら、進行役は度々「夢のことでいいんですよ」「実現不可能なことでいいんですよ」「本当にやってみたいことですよ」と投げかけました。すると、Aさんが突然、「私、赤ちゃんをいっぱい抱っこしたくてびーのに入ったんです。それが、やりたかったんです」とお話になりました。

はじめの発言は「びーのでの自分のあるべき姿」「びーのでも求められている自分の行動」など、日々の活動の中で自然に自分自身に課している制約の中から出てきたやりたいことだったのでないかと思えます。「赤ちゃんがいっぱい抱っこしたかったんです」と言ったAさんは、その後自宅でも月に一度のひろばを開設しました。びーのの活動も積極的に生き生きと参加していただき、誰のためでもない私がこれをやりたくてやっているという信念を感じます。

事例2

2月の「今年の私のびーのびーの」において、スタッフBさんは「他の人

はとても立派に見え、自分に自信がない」見守りとかひろばのファシリテーターと言われても困ってしまう」と困惑気味でした。今年の自分のびーのびーのとの係わりを振り返り、聴いてもらい、仲間から「それがファシリテーターってことよ。Bさん、やっているわよ」と声をかけてもらい、「とにかくこの1年、私は子どもが好きだったという事がわかったの」と子どものエピソードを語りだす。

ひろばでは生き生きと明るく魅力的なBさん。しかし話し合いの場では、これまでは居心地が悪そうでした。小グループで話し、自分のひろばでの姿を仲間が認めてくれていることを知り、「自分のやっていることは意味がある」「自分は役に立っている」「今度はこんなことをやってみたい」と前向きな意欲が持てたようです。

⑥ 振り返りミーティングとの関係

みんなで話そう会はびーのびーのでも週1回続けられている「振り返りミーティング」と密接に関係しています。振り返りミーティングは週に1回、その1週間を振り返る集まりです。スタッフには以下のように投げかけています。

何かを決める集まりではなくて、ひろばの日常、中味について話し合う場です。今日こんなことがあった。会員さんがこんなことを言っていた、シフトに入ったときいつもこんなことが気になる、子どもがこんな遊びをしていた、あのお母さんが気になる、そんなひろばの日常について話し合うことが、びーのびーののひろばをさらに豊かにしていってくれると思います。

誰かの意見が正解と言うことではなく、「私はこう思う」「私だったらこう」と多様な意見が出る会にしたいと思えます。びーのにたくさんの親子が来ます。その一人ひとりが、いろいろな考えを持っています。あーこんなふうに考える人もいるのか」と多様な考えにスタッフが触れていることが、柔軟な対応に繋がると思えます。専門家の意見が正しい、誰かが正解を持っているということではなく、私はこう感じた」と教えてくれることが他の人にとっての「気づき」となり、大きな助け

となっていくと思います。そして他の人の考えを知ることにより、自分の考えも広げ深め新しくしていくことが出来ると思います。

「正しいことを知っている」「何か特別なことを知っている」「たくさん知っている」ことよりも自分の言葉で一日を振り返る事を続けて行います。

振り返りミーティング（前身ひろば会という名称）は、みんなで話そう会に先駆けて2002年から始められています。この導入にはより多くの抵抗がありました。「何を話したらいいのかわからない」「悪口を言う会」「自分はまだボランティアでお手伝いをしようと思っただけなのに」「専門家でもないのにそんなことを話すのはおこがましいと感じる」と参加も消極的でした。はじめは月1度で参加者の自由な話し合いの場でしたが、ひろばの出来事を話すと言うよりは、行事の話になり日々の運営の話になりがちでした。そこで、それまでは事務連絡の項がほとんどであった日誌を、ひろばの様子を記入する欄を大幅に増やしたものに更替し、回数も週1度にその日誌をたどりながら話し合いを進めるようにしました。最近では日誌は裏表びっしりと書かれ、当初1時間の予定であった時間も大幅にオーバーするようになりました。このような自分の言葉で語り、互いに聴きあうという地道な繰り返しがあってこそ、みんなで話そう会も導入できたと思います。

臨床心理士がスタッフにいるのでファシリテーター役をしています。

⑦ファシリテーターの役割

このような研修において、ファシリテーターは大きな役割を果たしています。皆で話すというのはとても難しく、ファシリテーターのいない場では誰かがリーダーシップをとり、後の人はそこに甘えたり、言いたくても発言できなかつたりということがおこりがちです。結論を出すことを急ぎ、話し合いがすぐに終わってしまうこともあります。あるいは、取り組みやすい具体的な決定事項についての話し合いにすりかわってしまったります。びーのびーのは幸運なことに、設立時から専任アドバイザーの伊志嶺美津子先生が見守ってくださり、みんなが話そう会ではファシリテーターをしてくださいます。伊志嶺先生が出席出来ない時も、

(12)情報提供プログラム

①びーのびーの 情報提供

実施ひろば名:おやこの広場 びーのびーの

実施担当者:成迫真貴(広報・ココマップ)・関谷容枝(広報・ココマップ)
山田弘美・伊集院純子・賀内順子・工藤百代(広報)
畑中祐美子(HP・ココマップ)
協力スタッフ 青木なおみ(デザイン) 谷藤博子(HP)
吉崎真弓(HP) 松野誓子(POP)

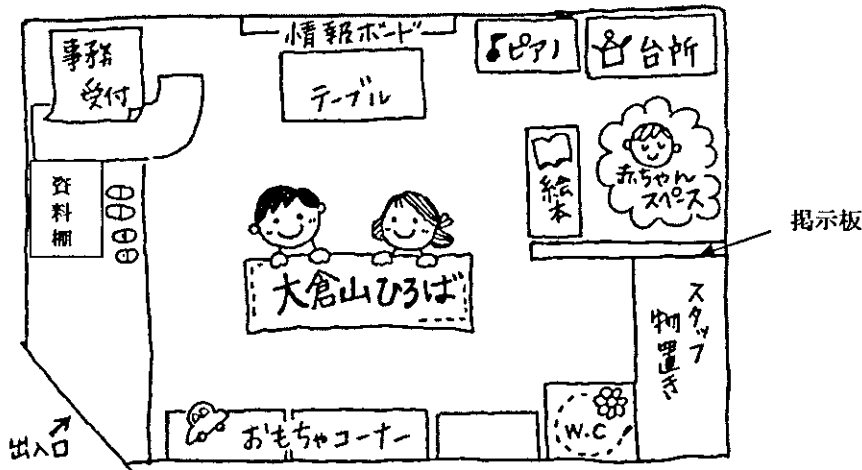
(1) ひろばでの情報コーナー

ひろばには、情報掲示板と、外部団体からの資料をおいておく棚(以下、資料棚と略します)があります。

掲示板には、ひろば行事の案内・募集チラシを出すだけでなく、地域のイベント、子育てに関連した、さまざまな講座や、講演・研修会の情報、地域の子育てサークルのメンバー募集のチラシなどを貼りだしています。多様な情報ですが、その中で、自分の子育てにとって役に立ちそうなものを、選んでいくことができます。

資料棚には、地域の子育て支援を行っているグループや、行政からの案内チラシ、他団体のリーフレットなどをおいてあり、持ち帰ることができます。

掲示板、資料棚を通して、ひろばだけに閉じた情報でなく、親子が地域へと目を向けられる、きっかけづくりとなればと思っています。そして、ひろばにきてだけで、何かしら情報を得られるということも、大切にしたいと思っています。



(2) 港北子育て応援MAP「ココマップ」(インターネットサイトの制作・運営)
(<http://www.kouhokushakyo.or.jp>)

○制作の目的

日々の子育てに追われながら、子育てに関する情報を入手することが大変だという当事者としての思いがありました。具体例をあげれば、「一時預かりのできる保育園はどこか?」と、役所に出かけてもらえる情報は「一覧表」という形式で、それを持ち帰り、自分の家から行ける場所はどこか、近隣の地図を広げて、「一覧表」と照らし合わせて探し、初めて各機関・施設に連絡するという工程の煩雑さがあります。また、子連れで役所へ行かねばならないという時間的負担と精神的負担があります。行政や、各機関が出している情報は断片的で、自分にとって必要な情報にたどりつくまで、まとまった時間のとれない子育て世代にとっては、とても不便なものです。

子育て情報をひとつにまとめたサイトがあれば、子どもが寝入った夜などに情報を入手することができるのでは・・・、という思いを感じていた時、港北区社会福祉協議会のほうから、子育て情報サイトを作りたいという話があり、自分たちのやりたいことと合致、サイト作りを始めることになりました。

○作成方針

★とにかく見やすいこと。分かりやすいこと。

★自分の住んでいるところから、どれくらいの場所にあるのか、ひと目でわかること。

上記2点を基本方針として、制作を行いました。

○サイト概要

★港北区を7エリアに分割、公園情報・仲間作りなど6つの分野に分けて、それぞれ地図上での位置と内容の紹介と、同時に、同じカテゴリーのリストでの紹介をしています。

・イベント情報：月2回更新。

区内のいろいろな場所で行われる講座・行事・コンサートなど

・特集情報：3ヶ月に1回更新(季節に一度のイメージ)

地域のおまつり特集・保育園の地域開放情報・クリスマス情報など

※企画決定にあたっては、各エリアから子育て中の当事者である親を編集委員に選出し、月1回、編集会議を行って決定しています。

★アクセス数は、6ヶ月で約9000、月に延べ約1500人のアクセス

○びーのびーのとして取り組む意義

★ひろばに集うお母さんたちの声、スタッフの意見などを集約しながら、当事者である自分たちの視点を最大限に活かしたサイト作りができています。

★びーのびーのがこれまで培ってきた、ネットワーク・情報収集力を活かすことができています。

★情報からはいる若い親が多いことから、かもの見える関係性へと発展させるツールとして重要。とにかく地域のさまざまな場へ出てきて欲しいとの思いがあります。

○課題

区内という狭いエリアの情報を、マンネリ化せず、新鮮に届けていくこと、その見せ方と、見ている側との意見をどう集めて、双方向性をもったサイト運営にむけての仕掛け作りが課題です。

(3) 幼稚園・保育園ガイド

○制作の背景

港北区は、子育て世代の出入率が高く、親たちは地縁もなく何も情報もない中から幼稚園・保育園を選ばなければいけないという状況がありました。そして、保育園については待機児童が非常に多く、認可保育園だけではなく横浜保育室などのいろいろな保育園の情報を提供していくことが望まれていました。また、幼稚園については、横浜市は全て私立であるため、園によって方針や内容が全く異なるという状況であるにもかかわらず、親たちはそのことを知る機会もありませんでした。

これらのことが、幼稚園・保育園ガイドを作る背景としてありました。

○制作の方針・目的

ガイドの意図・目的としては、まず、この地域の園を全て紹介し、どんな園があるのか、この一冊でわかることです。そして、それぞれの園の特徴・方針・内容・保育費など、一律に情報公開をしていくことが重要だと感じています。

そして、幼稚園・保育園ガイドが単なる、園の情報を得るだけの情報誌ではなく、幼稚園・保育園選びをきっかけに、自分たち家族にとってどんな園がいいのか、ひいては自分たちはどんな子育てをしていきたいのか、立ち止まって考えるいい機会になってくれればという思いで制作に当たっています。

制作にあたっては、園と保護者の両方から、原稿をいただき掲載しています。

○幼稚園シンポジウム・保育園シンポジウム

私たちが、上述した思いから制作している幼稚園・保育園ガイドなのですが、この思いを一時的なものだけに終わらせるのではなく、実際に園選びを始める親たちと意見を交換したり、同じ地域に住む中で一緒に園について考えていきたいという思いから、ガイドを発行した後、シンポジウムも合わせて開催するようになりました。幼稚園シンポジウムは、園選びを開始する時期が、例年6月頃であるため、その時期に、また、保育園シンポジウムは、入所申請を出すのが12月前半であるため、その頃を選んで開催しています。

(4) 広報紙「びーのびーの通信」

○概要

びーのびーのの広報紙「びーのびーの通信」は本年4月で60号目を迎えました。その紙面は2Pと4Pサイズ、いずれかを毎月25日頃、2000～2500部を発行しています。その配布先はひろばの会員・見学者など来館者、港北区およびその近隣地域の公的施設・病院・薬局・店舗など約50ヶ所、正会員および全国の支援・協力団体約60団体などです。またホームページ上でも通信のバックナンバーを掲載し、全国の方に見ていただいています。

○紙面の内容

ひろばの様子やカレンダー、イベントやプログラム・セミナー・講習会などの予告と報告、会員さんやスタッフの紹介や座談会、外部ネットワークや地域への取り組みや会計報告など、多岐にわたっています。

○制作方針

「NPO法人びーのびーのとは?」、「ひろばとは?」、初めて見る人を意識し、びーのびーのの活動を理解してもらい、気軽にひろばに立ち寄ってもらえるよう、読みやすくわかりやすい紙面づくりを心がけています。

○成果・反響

実際に、どこかで、「びーのびーの通信」を見てひろばに来たという会員さんも多くあります。また配布先ではたくさんの励ましの言葉をいただいています。

(5) ホームページ (<http://www.bi-no.org>)

現代の情報発信ツールとして、インターネットは欠かせないものです。びーのびーのを知ってもらうツールとして、広報誌とともに、ホームページを制作運営しています。

平成16年5月より、パスワード制限付きとして、

- ・「今月のびーのびーの」(ひろば内外のトピックスをレター形式で発行)
- ・「対外活動記録」(ひろば外での活動記録、取材見学の状況などの情報公開)
- ・「マスコミ掲載記録」(その月にマスコミ・他団体機関紙などへ取り上げていただいた内容の情報公開)

を閲覧可能としました。

これにより、正会員・賛助会員への一部には、パスワードを公開し、そのページへアクセスすることで、広報誌発送をメール配信で代行できるようになりました。

HPからの書籍購入も多くなり、海外からの購入申し込みも入るようになりました。書籍購入者からのダイレクトな反響や、施設への問い合わせ、励ましの言葉などを時折いただくことがあります。

このような双方向性こそが、ホームページのよさであると思います。

○アクセス：2005年3月時点で約49000回の来訪(平均月間ヒット数 約2000)

○コンテンツ概要

- ・最新トピックス : 行事の案内・開催告知
- ・ひろばへようこそ : ひろばとは? ひろばの概要を示し、ひろば行事の記録
- ・ひろばカレンダー : ひろば行事のカレンダー(広報誌と連動)
- ・ひろばの利用案内 : 初めてひろばへ来る方向けに、ひろばの利用料金・利用方法など
- ・びーのびーの通信 : 広報誌をPDF形式で掲載。バックナンバーも見られる。
- ・活動案内 : ひろば運営だけでなく、法人としての広い活動の様子を掲載
書籍のインターネット販売
- ・組織概要 : 法人の組織・所在地・施設見学者向けの案内
- ・正・賛助会員募集 : 法人の運営を支えていただけの方への案内
- ・リンク集 : 関連団体・行政機関・地域のネットワークなどへのリンク集
- ・スタッフ・会員向け : パスワード制限付き。会員限定の情報などの掲載。

②くすくす

広報活動

- 1 プログラム名…広報活動
- 2 実施ひろば名…特定非営利活動法人子育てネットくすくす子育て広場
- 3 実施担当者

担当者名	役割		立場
渡邊 顕一郎	パンフレットやニューズレターの発行人		理事長
間島 いずみ	ニューズレターの作成、ホームページの作成及び更新、広場内掲示物の管理等		事務局長及び広場スタッフ
松木 由佳	毎月の行事予定表作成、メールマガジンの情報配信、広場内掲示物の管理等		事務局及び広場スタッフ
森 谷子	広場活動紹介パンフレットの作成、広場内掲示物の管理等		事務局及び広場スタッフ
草薙 めぐみ	他団体や行政との連絡・協力依頼・調整、広場内掲示物の管理等		副理事長、子育てコーディネーター

4 実施の方法と内容（実施日時・実施対象者を含む）

広報名	発行日時・場所	広報対象者	広報の方法と内容
活動紹介のパンフレット	・2004年4/1、10/5 計2回発行 配布場所（主に市内） ・子育て支援センター ・市役所 ・児童センター ・小児科 ・産婦人科 等 その他、県や市主催の子育て関係者のイベントなどで配布。	近隣の子育て家庭及び不特定多数の方	【方法】ひろばの見学者に配布する他に、子育て家庭が出入りする公共施設等に設置し自由に取って頂くかたちで配布を行っている。また市の福祉課、保健課及び他の子育て支援サービス担当者の協力を頂きながら各施設での配布や市主催育児教室での配布をおこなっている。4月発行時は白黒刷りA3サイズふたつ折り1600部、10月発行時はカラー刷りA3サイズふたつ折り2000部を発行した。 カラー刷りのものは現在も配布中。 【内容】団体の概要、方針、広場の紹介、行事の紹介、利用案内(活動時間、会費、利用料、対象)等